岐阜新聞真学塾

出題　螢雪ゼミナール

岐阜駅前校・築樋拓真

国語を様々な側面からみて、日本語の面白さや深さを知ってもらえればと思います。

問題【国語】

（　　）の中に入る枕詞を入れてみましょう。

（　　）山のしづくに　妹待つと　われ立ち濡れぬ　山のしづくに

豆知識 雑学コラム

リズムがアップ!? 枕詞

今回は、枕詞についてみていきましょう。枕詞は、和歌の技法のひとつで、ある言葉の前に入れるお決まりのフレーズのことですね。今回の問題の和歌では、「山」の前に「あしひきの」というフレーズが入ってきます。この枕詞にはどんな効果があるのでしょうか。考えてみましょう。

まず、意味についてみていきましょう。「あしひきの」は現代語に訳すと「足を引きずるぐらい険しい」という意味です。そのことを踏まえて、和歌全体を訳すと「足を引きずるぐらい険しい山に雫がたくさんある、あなた（恋人）を待っていると、私はその山の雫に濡れてしまった」という内容です。この和歌で伝えたいポイントは「山の雫に濡れながらも、恋人を待っている一途な思い」です。このポイントを踏まえると「足を引きずるぐらい山が険しいかどうか」は和歌の中で重要でないように感じられます。このように枕詞は、和歌のなかで伝えたいポイントとは直接関係がないことが多く、現代語訳をする際に意味を気にしなくてもよいと言われることもあります。では、和歌で伝えたいポイントと関係ないのになぜ枕詞をいれるのでしょうか。

その理由は響きやリズムです。大昔にある人が「あしひきの山～（足を引きずるぐらい険しい山で～）」という一節のある和歌を詠みました。この和歌を耳にした人がその「あしひきの」という言葉の響きやリズムに感銘を受けました。そして、耳にした人が山についての和歌を作る際に山の険しさと関係なく「あしひきの山」と詠んで響きのよい歌にしました。これが続いていったことで「あしひきの」が本来の意味と関係なく「山」と結びつく枕詞になっていったということです。残念ながら、この最初に本来の意味通りに「あしひきの山」と詠んだ人物が誰かという記録は残っていません。しかし、「万葉集」の時代には「あしひきの」は本来の意味とは関係ない枕詞として使われるようになっていたことは分かっています。

さて、和歌の響きやリズムが良くなると言われても、いまいち、ピンとこないかもしれません。古典の言葉なので当然ですよね。しかし、現在でも枕詞のように、リズムが良くある言葉の前に入れるお決まりのフレーズを普段耳にすることがあります。こうしたものの一つにCMのキャッチフレーズが挙げられます。例えば、「ファイトー」と聞くと「一発」と連想してしまいませんか。現代人が耳に残ったCMのフレーズを使う感覚で、古典の世界の人たちも前に聞いて耳に残った枕詞を使っていたのかもしれませんね。

【解答】

あしひき